Challenge（チャレンジ）

“今”を生きる

東北の片隅にある中小病院に赴任した若き医師。
試行錯誤の日々の中から、医療人としてのあるべき像が結ばれはじめた。
（コーナータイトルを改題しました）

産婦人科医への挑戦

医療ガバナンス研究所
内科医・研究員
山本佳奈氏

産婦人科を学び終えた大学４年生の終わりのころから、私は産婦人科医になりたいと思うようになった。生命が誕生することの尊さに感動し、女性の人生において大きなイベントの１つである妊娠・出産に、同じ女性としてかかわっていきたいと思ったからだ。

その思いは、研修医になっても変わらなかった。南相馬市立総合病院に初期研修医として赴任し、３カ月間の産婦人科研修を終えて、その思いは強くなった。年間200件を超えるお産、婦人科の手術、外来をこなす毎日は、想像以上に大変だった。夜中にお産が始まることもあれば、緊急手術が必要になることもあり、生活は不規則になり、睡眠不足の日々が続いた。それでも、妊婦健診の際に行う胎児エコーがうまく使えるようになり、お母さんのお腹の中での胎児の成長を一緒に見守ることができることが、私にはとても幸せだった。生命の尊さを肌で感じ、産婦人科医になりたいという思いは強くなった。

だが、その思いは届かなかった。研修医２年目の秋のことだった。産婦人科の後期研修医として、そのまま南相馬市立総合病院に残りたいと、たった１人の産婦人科医に伝えたところ、返ってきた答えは、「面倒を見ることはできません」のひと言だった。

そのひと言は、私にはとても辛かった。南相馬を離れて産婦人科医として研修可能な病院に行くか、産婦人科医としてではなくても南相馬に残るか。私は悩んだ末に、後者を選んだ。南相馬で医師として医療に貢献したいという思いのほうが強かったからだ。

そんな私が、なんとか産科の研修をすることができるよう尽力してくださったのが、神奈川県病院機構理事長の土屋了介先生だった。土屋先生は、私を全力で応援するといってくださった。そして、私が南相馬に所属しながら、神奈川で産科研修ができないか、神奈川県立こども医療センターにお声がけしてくださった。だが、正常分娩を少なくとも1000件経験してから来るようにいわれ、話は流れてしまったが、全力で応援してくださった土屋先生に、感謝の気持ちでいっぱいだ。今でもお会いするたびに「頑張ってね」と気にかけていただいている。

福島医科大学理事長である竹之下誠一先生も、私の置かれた状況を見かねて尽力してくださった１人だ。将来は女性の総合医になりたいという私の思いを知り、「それならばマンモグラフィの読影資格を取りなさい。そのために福島医大に研修に来なさい」と。乳腺外科で月２回程研修をさせていただき、マンモグラフィの読影方法を学んでいる。病棟業務が忙しくなり、福島市内まで通うことが厳しい時期もあったが、なんとか資格が取れるよう業務と勉強を両立させている日々だ。竹之下先生も、お会いするたびに、「絶対に資格を取るように。そのために全力でサポートするからね」と気にかけてくださっている。感謝の気持ちでいっぱいだ。

南相馬で産婦人科医として働けないと分かったときは、とても辛かった。進みたい診療科を選び、皆がスタート地点に立っている中で、１人スタート地点に立てていないことに焦り、途方にくれる日々だった。だが、全力で応援していただき、前に進むことができた。

内科医としてスタートし、あっという間に１年が経とうとしている。壁にぶつかりながらも、なんとか乗り越えることができているのは、多くの人に支えていただいているからだ。感謝の気持ちを忘れず、日々精進していきたい。